

地域包括ケアシステムにおける認知症疾患医療センターの果たすべき役割 第6報 ～コロナ禍における地域交流の場としてのサロン～

島崎 裕子¹⁾ 瀬間 良礎¹⁾ 森田 詠子¹⁾ 八木 瑞貴¹⁾ 太田 広海¹⁾

針谷 康夫¹⁾²⁾ 美原 盤³⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所美原記念病院 認知症疾患医療センター

2) 公益財団法人脳血管研究所美原記念病院 脳神経内科

3) 公益財団法人脳血管研究所美原記念病院 院長

[はじめに] 認知症患者を地域で支えるために、「地域交流」は重要な課題である。しかし、2019年末から始まったコロナ禍は、地域交流を抑制させ、認知症ケアにも大きな影響を与える可能性があった。当認知症疾患医療センターは、地域包括支援センターと共催し、認知症患者とその家族、地域住民を対象に、体操、健康講話、茶話会など行う健康オレンジサロンを開催、認知症患者の地域交流を推進してきた(第73回日本病院学会 in 宮城)。今回、コロナ禍においてもサロン参加により地域社会との交流が維持できた症例を経験した。なお、サロンでは感染対策として手指消毒、マスク着用、換気などを行っていた。

[症例 1] 90代女性。長男夫婦、孫と同居。当センターでアルツハイマー型認知症と診断、かかりつけ医でフォローされていた。BPSD出現による当センター再診時、コロナ禍により地域との交流がないことを把握、サロン参加を促した。患者はサロン参加での他者との交流を楽しみ、その様子を見た家族はサービス利用に対する不安が払拭され、介護保険サービスの利用に繋がり家族の介護負担が軽減した。

[症例 2] 80代男性。妻、長女夫婦、孫と同居。5年前に混合型認知症と診断、かかりつけ医でフォローされていた。妻は介護の悩みや不安がありながらコロナ禍で相談できずにいた。妻から当センターへ相談がありサロンを案内した。妻は専門職から認知症ケアに関する助言を受け、思いを共有できる仲間ができ不安が軽減した。本人も得意な歌を披露するなどサロンが新たな居場所になった。

[考察] 認知症患者は家族とも地域で孤立しやすい。コロナ禍はこの孤立を増長するリスクがあった。認知症疾患医療センターは、孤立している地域の認知症患者とその家族を見出し、積極的にサロン参加を促すことは、患者とその家族の社会的孤立を防ぐのみならず、認知症ケアに必要な地域交流の場となり、地域包括ケアシステムの拠点

になり得ると思われた。